

## [33] プラハ・ブラックライト・シアター

### イルジー・スルネッツの冒険

1995年8月8日 公明新聞

劇場の親密な薄暗がりのなかに、光を使って幻想的なイメージが花開く。プラハはメルヘンチックでしっとりしたたたずまいを見せる街。そこに住む人々が、そんなブラックライト・シアターを好むというのも分かる気がする。

プラハの町を歩いていると、ブラック・ライト・シアターと同じ種類の劇場の案内をよく見かける。これは今プラハでとても人気の高いスペクタクルなのである。

しかしこのアイデアあふれる独特の舞台芸術は、昔からプラハに存在していたわけではない。イルジー・スルネッツが編み出したものなのだ。そして聞くところによれば、やはり数ある同類の劇団のなかでも、彼の「ブラック・ライト・シアター」だけが本物の創意とポエジーにみちたものなのだろうである。

スルネッツがこの手法をはじめて舞台化したのは一九六一年、彼がまだ三十そこその時だった。ほんの小品だったが、映像と実際の人間とが舞台上で相対し、音楽にのってユーモラスな物語を展開した。

たとえば『小さな洗濯屋』という作品は、娘が物干しに洗濯物を干して立ち去ったあとで、スリッパをめぐって男もののズボンたちが恋の大活劇を演じる。ただの品物だと思っていたものが、人間のように心を持ち、人間よりも元気いっぱいに生きている。その新鮮な驚きを何と表現したらいい

## [33] プラハ・ブラックライト・シアター

### イルジー・ヌルネッツの冒険

1995年8月8日 公明新聞

いだろうか。ふつう私たちが見ている世界はうわべだけのまやかしに過ぎないかもしれない。ほんとうはその向こう側に、物たちが心をもって動き回る世界があるかもしれないのだ！

『魚』というのも、ゆかいな話である。お金のない客がタクシー料金の代わりに魚をくれた。運転手が家に帰ると、その魚が大きくなってベッドに入ってくる。そして色っぽい女の人みたいに、しなを作ったりするのである。

こどもなら、むじやきに声をあげて笑うだろう。不機嫌なおとなだって、つい吹き出してしまいう明朗なユーモアだ。けれども思わず笑ってしまったあとで、ふと考えさせられてしまうものが、これらの作品にはある。

\* \* \*

第二次世界大戦が終わってこのかた、チェコとその首都プラハが置かれてきた状況は、けっして安閑とした開放的なものではなかった。現在はプラハにもものどかな自由の風がふいているが、ほんの少し前まで共産主義の統制のもとで、思想も表現も厳しい規制を受けないではすまされなかったのである。そのような困難な精神状況で生まれたのがブラック・ライト・シアターだった。抑圧の下で明るさと自由を表現しようとしたとき、スルネッツは言葉をもたない物たちに自分の心を託する以外なかったのかもしれない。

その一方で、カフカ文学を生んだチェコの風土

## [33] プラハ・ブラックライト・シアター

### イルジー・スルネッツの冒険

1995年8月8日 公明新聞

の神秘的な芸術性とも無関係ではあるまい。ブラック・ライト・シアターに深い哲学性が感じられるのは、理由のないことではないのだ。

さて、この夏の日本公演に用意されているものとしては、先にのべた初期の小品集のほかに、もう一つ、『ふしぎの国のアリス』がある。

考えて見れば、『アリス』ほどブラック・ライト・シアターにぴったりの物語はない。白うさぎに導かれて、ふしぎの国に入っていくアリスの冒険は、ほんとうは数学者ルイス・キャロルが考えた理論的な錯覚の世界なのだそうだが、物の表層にとらわれないこどもの眼には、心はずむ夢の世界である。想像力が柔軟なこども（あるいはこどものようなおとな）にとっては、無表情のそっけない品物や動物たちが伸びたり縮んだり、笑ったり怒ったりするのも、世界がほんとうはそうあるべき真実の様相なのだ。

幻想文学の一大傑作とみなされ、世界中のおとなやこどもに愛読されてきたこの文学作品は、しかし視覚芸術に置き換えることが難しいのが問題だった。できたとしても絵本かアニメ、せいぜいが特殊撮影をフルに使った映画である。いずれにしてもスクリーンに投影された映像でしかない。ところがブラック・ライト・シアターでは、アリスもほんものの女優さん。それがぐーんと首が長くなったりして、あれーッ、どうなってるんだあ、というぐあいになる。それがまったくアリス

## [33] プラハ・ブラックライト・シアター

### イルジー・スルネッツの冒険

1995年8月8日 公明新聞

本人が感じたように、なのだ。

\* \* \*

このスペクタクルには、なかなかこみいった仕組みがあるらしい。種を明かせば、物体に特殊な塗料をぬって、それにライトを当てると、塗料の部分だけが浮かび上がって見えるということのようだ。物体は自分では動かないから（ほんとうに残念なことだし、この劇場にしばらくいると、そうは思えなくなってくるのだが）、かげに動かしている人間がいて（ちょうど文楽の人形使いのように）、それで物たちと人物たちとの異次元的交流が可能になる。いってみれば想像力が縦横無尽に活躍する世界なのだが、それを支えているのはやはり、人間の知恵と技術なのである。

ところが、そんなえらそうなことを言う私自身、プラハで実際に見たときには、いったいどうなっているのか、まったく分からなくて、ただびっくりしていた。終わってから、どうしてあんなことができるのだろうと不思議がったら、いっしょにいた友人が、でもかげに人が見えたじゃない、と言った。私ときたら、ひたすら幻想の世界を浮遊していたのだ。だから、この夏ブラック・ライト・シアターが東京に来たときには、ぜひともこの眼で種明かしをしなくてはと、ひとり意気込んでいる。